

記念講演「暮らしと教育、そして障がい 子どもの暮らしはどこにある」

島根大学大学院 教育学研究科 教職大学院
教授 肥後 功一

1. はじめにー今日、何が変わったのか？

日本失語症学会の事務局がある病院に勤めて、初めて言語臨床という分野があることを知った。国立特殊教育総合研究所（当時）とのかかわりで、それを行う学校教育があることも知った。当時のそれは、多様な姿をもつことばの諸相のうち「医学モデル」で取り扱える側面に注目して、その改善を図るものだった。その後、国立特研に勤務することになり『障害児（障害者）の暮らしとコミュニケーション』というシリーズの編者の末席に加えていただいた。



その中で、①コミュニケーションの不成立を対象の子どもとかかわる大人との関係の問題としてとらえて、指導の方法を考えること、②意思の伝え合いは「今、ここ」という状況のもとに、他者の意図の読み取りは「その場」「その時」の状況の助けによって成立するもの、といった問題提起をしたことが、本日の講演と関係する。

今日、障がいに対する見方・考え方は大きく変わった。インクルーシヴの流れの中、障がいは、個人の特性の濃淡（スペクトラム）と考えられ、周囲の状況や関係の中で判断するものと考えられるようになった。個人が抱える生きにくさは多様なものであり、それは周囲との関係の中で理解・調整・支援されるべきものであるという「社会モデル」が重視されるようになったためである。一方で特別支援教育は「社会モデル」に立った専門性へと移行しているだろうか。特別支援教育コーディネーターとしては「社会モデル」に立って合理的配慮等を訴えながら、自らは相変わらず「医学モデル」に立った教育をしているという、矛盾をきたしていないか。

2. この時代の「生きにくさ」が意味することー対人イメージ（自己イメージ）の変化

この50年程で、「袖すり合うも他生の縁」と言っていた社会から、「傍若無人（まるで傍に人がいないような）」とも言える社会に変わった。対人的距離感が変化し、関心を持つてつながっておきたい人に対する異様に高い関心と、そうでない人への関心の異様な低さとのコントラストが、教育をめぐるさまざまな事象に現れている。

他者イメージや自己イメージは、乳幼児期のなぞったりなぞられたりする身体的関係を基盤として育つ。言葉が獲得される前に、コミュニケーションの基盤である関係性が先に形成され、その上にことばの発達が形成される。そこには後の学習の基礎、心の安定の土台が含まれている。こうした基盤が、脳神経学的な理由によりもともと困難な人がいることを正しく理解すると同時に、この時代は、生身のやりとりが疎かになり、対人的な関係形成の基盤が全体として脆弱になっていることにも注目しておく必要がある。

3. コミュニケーション支援は、なぜ「関係性」に注目するのか

初期の言語獲得は、表面的には「実物としての犬」と「言語記号としてのイヌ」とが結びつく認知過程として捉えられるが（縦軸）、これを成立させている横軸として、おとな（親）と子どもとの関係性を見ておかなければならないとするのが、いわゆる三項関係のモデルである。実物の犬と“わんわん”という音声言語とをペアにして記憶するだけではコミュ

コミュニケーションにつながることはならない。「見ているもの」の共有→「見ている気持ち」の共有（～だよな?と投げかける気持ちの生成）→「音声言語記号」の共有というコミュニケーションの基本的なプロセスは、かかわり（関係機能）を横糸に、わかり（認知機能）を縦糸にして、まるで織物のように作られていく。コミュニケーション世界の構築とは、モノの世界から意味のネットワーク世界に生まれ直すことでもある。

4. コミュニケーション支援は、なぜ「内面性」「全体性」に注目するのか

発達支援の目的は、子どもの発達の可能性を最大限実現するよう支援すること、子どもの中にある「今、伸びたがっている力」を見出し、その力を使って世界と交流する力を育てることである。社会的な生きにくさを軽減することは必要だが、大人や社会の目的に適合させるために、子どもの行動を変容させることを本旨とするものではない。

生活世界という背景を失った精神機能、子どもの全人的な育ち（そのらしさ）から切り離された能力…そうしたものを検査によって個々に査定し、非日常的な教材やトレーニングプログラムによって「改善」可能と考える「医学モデル」からそろそろ脱却し、インクルーシブ教育がめざす「社会モデル」に基づく専門性が発揮されるべき時であろう。

子どもの全人的な存在に正面からアプローチすることの意味と方法については、本日の基調提案が考えさせてくれた。子どもの内面は、内面に着目する他者と出会うことによつてのみ育つ。かかわり手との間に意味の世界を作り出す中で、子どもの一番伸びようとしているところを伸ばす。その取り組みの中で、不得意なところも一緒に伸びていく。毎日の暮らしは、コミュニケーションを成立させている場＝意味のネットワークであり、その子の成長にとって意味を持つ人が増えていくことがコミュニケーションへの教育的支援である。

私たちは、「成すこと（Doing）の自信」と「在ること（Being）の自信」に支えられている。前者は学習や労働の基礎であり、後者は生活の基礎である。Doing は学校や職場の教育力で鍛えられ、「変化すること」「めざすこと」が大事にされる。一方、Being は家庭や地域の教育力で生まれ、「変わらないこと」や「過ごすこと」がその本質にある。Being を傷つけられると、Doing を発揮できなくなる。まずは Being が重要であり、その上でのみしっかりとした Doing の力が育つ。

次期学習指導要領の柱となるアクティブラーニング、そこで求められる深い学び、対話的な学び、主体的な学びは、Being の土台なしには立ち上がらない。学校教育には、今後ますます子どもの Being を支える相談的な場、居場所、変わらない毎日を支える暮らしの場の充実が必要になろう。「今、ここ」の暮らしは、「これまで」と「これから」を「つなぐ機能」を持つ。この「つなぎ」の専門性が重要だ。

特殊な道具や手法ではなく、ごくありふれた「普通の私」が「普通の子ども」と「普通に付き合うこと」は、本当は普通でなく難しい。学校教育の中で、普通であろうとすることは案外に難しいことではないか。その難しさ、つなぎの機能を追求し、親子の Being（普通に在ること）を支える暮らしの場として、難言教育・通級指導が発展することを祈りたい。



（記録：全難言協広報部）